『週刊ポスト』2018.9.21(金)発売号

名曲カルテ

昭和歌謡といつまでも

堀井六郎
絵・松本 浦

第50回 長崎キャバレー戦争が生んだご当地ソングの名曲

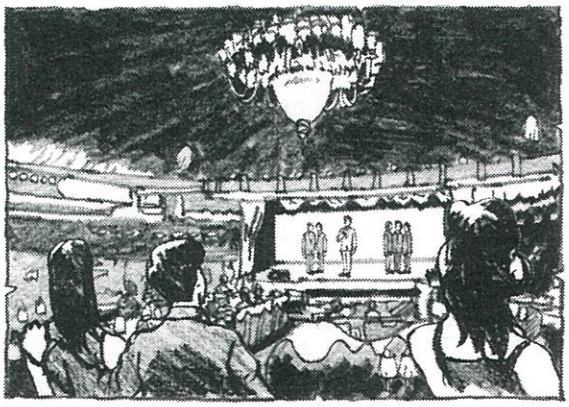
長崎がご当地ソングのメッカとしてその名を定着させる起爆剤となったのは、昭和43年に発売された高橋勝とコロラティーノの『思案橋ブルース』発売でしょう。

その背景には、長崎市内の歓楽街・思案橋界隈にあったグランド・キャバレー同士の熾烈な競争がありました。

キャバレー「十二番館」の専属バンドだったコロラティーノのフルート奏者・川原弘が作詞作曲した同曲が地元で評判を呼び、同年4月にレコード化の運びとなりますが、この経緯を知ったライバル店「銀馬車」の企画営業マン・吉田孝穂は、自ら作詞したオリジナル曲『長崎の別れ星』で対抗します。

前年、津山洋子とのデュエットで『新宿そだち』を大ヒットさせた大木英夫に作曲と歌を依頼、『思案橋ブルース』に遅れること1か月、同年5月に発売され、地元ではそれなりに人気を得たようですが、全国的にはヒットに至らず、吉田は自らの店の専属バンド、内山田洋とクールファイブに捲土重来を託します。

先代・林家三平が名付け親の花菱エコーズの持ち歌だった『西海ブルース』(佐世保観光協会推薦曲。作詞作曲した尾形義康は佐世保の流し)と東京パンチョスのリーダーだったチャーリー石黒(筆名・城美好)作曲の『涙こがした恋』のカップリングでクールファイブをデビューさせるつもりが、諸般の事情で『西海ブルース』がお蔵入りとなってしまいます(後年、レコード化が実現)。



あわてた吉田は、あらたに「長崎の夜」と題した歌詞を創作し、北海道に飛びます。そこにいたのは北海道放送のディレクター、新居一芳。森進一の『花と蝶』『年上の女』などをヒットさせていた作曲家・彩木雅夫というもう一つの顔を持つ人物でした。

平凡な歌詞に大幅に手を入れ、『長崎は今日も雨だった』という歌詞を補い、斬新なタイトルとして用いたのも彩木だったようです。

吉田は「永田貴子(たかし、と読みます)」という筆名で作詞者として名前を連ね、ここに『長崎は今日も雨だった』と『涙こがした恋』のデビュー盤ができあがりました。『思案橋ブルース』発売から10か月、昭和44年2月のことでした。当時の歌謡界はGSからカレッジポップスへの移行期で、シューベルツの『風』などがラジオから流れていました。『西海〜』『涙こがした〜』『長崎は〜』は、どの曲にも共通して前川清が声をひっくり返して歌う箇所があり、これはあきらかにコロラティーノ中井昭の甘いハイトーン・ボイスを意識したものであろうし、当時、話題になっていた『熱海の夜』の箱崎伸一郎の女性的な歌唱法も影響していたかもしれません。

歌手になる前、工場勤務の際に事故で右腕を切断、『思案橋ブルース』の大ヒットから16年後に亡くなった隻腕の名ボーカリスト、中井昭の遺産は小さなものではありません。

ほりい・ろくろう　昭和27年東京都生まれ。慶應義塾大学文学部卒業後は25年にわたる出版社勤務を経て独立。現在は出版社経営の他、ライターとしても活躍。『私的「昭和大衆歌謡考」』第4集『しあわせになろうね』(グスコー出版)が好評発売中